

スーパー店員 夢追う二刀流

もう一つの箕島

中

チーム名の「マツゲン」は、和歌山を中心に近畿4府県で約50店舗を展開するスーパーマーケットの名前だ。

① ②

一見、同社が所有する企業チームにも見えるが、実はNPO法人の「和歌山箕島球友会」の野球部門の事業という位置づけ。

所属する36人の選手全員とスタッフ4人は正社員で、通常は朝からスーパーの店舗などで6時間働き、終業後に有田市の球場に集まって練習する。

最速152キロ右腕の奥田貫太投手(24)は滋賀県出身。八幡商から花園大を経て加入した2年目だ。

球場に近い箕島店で荷下

ろしや商品陳列などの仕事を担当する。毎朝午前5時に起床し、6時ごろから開店する9時までが仕事のピークだ。

勤務は原則6時間。「練習のため、少し早めに仕事を上がらせてもらったり、試合の日は休ませてもらう。しっかりと仕事と野球を両立させないと」と話す。

大学在学中にプロ志望届を出し、今もプロ野球選手の夢を追いかけている。

東直樹店長は「彼は仕事量も多いし、きびきびとした働き方が他のスタッフにもいい影響を与えている」と評価する。

和歌山インター店の鮮魚調理場で、軽やかな包丁さばきを見せるのは加入3年目の宮崎航大主将(25)だ。兵庫県出身の捕手。神戸国際大でも主将を務めた。

店舗では刺し身の調理などを担当している。「就職するまで魚をさばいたことはなかったが、ずいぶんう

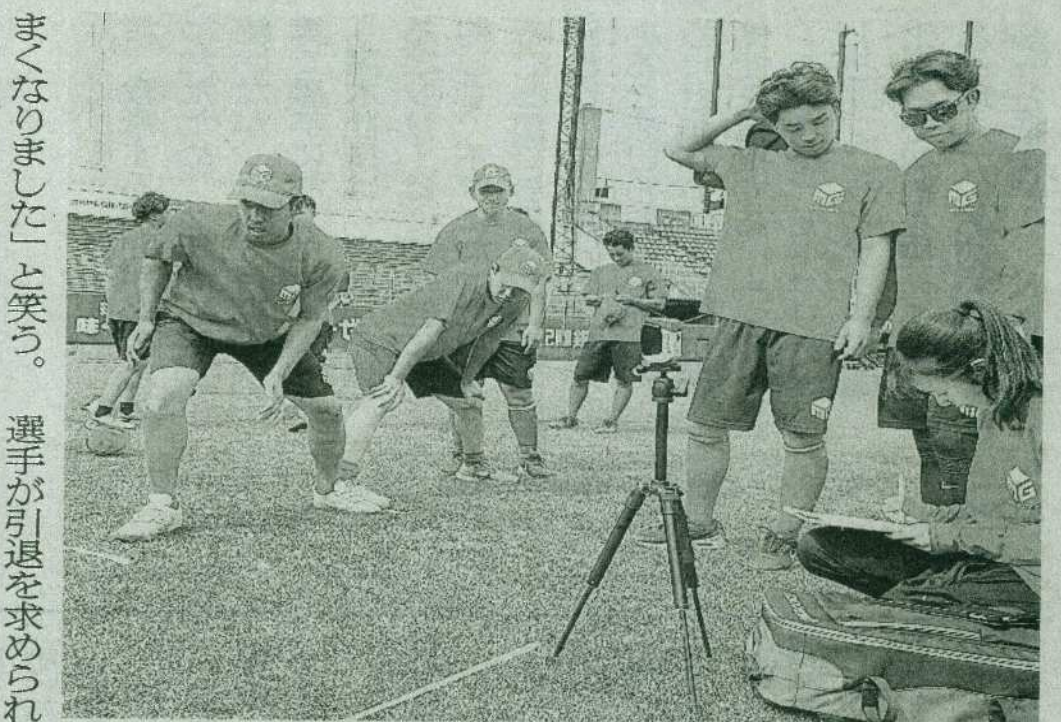


開店前の店舗で商品を棚に並べるマツゲン箕島の奥田貫太投手＝有田市箕島



慣れた手つきで刺し身を調理する宮崎航大主将＝和歌山市田屋

プロ目指す選手ら 引退後、役員への道も



トレーニングに励むマツゲン箕島の選手たち＝10月2日午後、有田市宮崎町

まくなりました」と笑う。

選手が引退を求められる現実もある。

監督の西川忠宏さん(64)は「出場機会などを考える10人前後の新しい選手が加入する。社会人クラブチームでは珍しく、平日でも球場で練習できたり雇用が保障されていたりなど、企業チームに近い恵まれた環境だからだ。」

すでに他の企業から内定をもらっている「働きたがら野球を続けたい」と門をたたく学生、プロ選手を目指す若者も少なくない。その一方、ほぼ同じ数の店長など会社を引っ張る存

在になるケースも少なくない。野球部出身で初めて執行役員となった大北匠央さん(37)は、2014年まで4年間プレーし主将も務めた。

当時、引退した選手は会社も辞めるケースが多かったというが、「選手時代から仕事が楽しかった」。働き続けることに迷いはなかった。

現在は営業本部の副本部長という立場で、マツゲン箕島を強くするため知恵を絞る。

現役時代は平日8時間勤務で、週末は試合などで埋まりプライベートの時間がほとんどなかった。大北さんの提案で、勤務時間を原則6時間に短縮。さらに野球も仕事もない完全休養日を週1日設けた。

大北さんは「野球経験者は仕事を粘り強くやり遂げることができる人材が多い」と話す。

「選手の負担を減らし、チームが強くなれば学生の注目が高まる。その結果、さらに良い人材が集まってくるはず」と好循環を思い描く。

(白木琢歩)